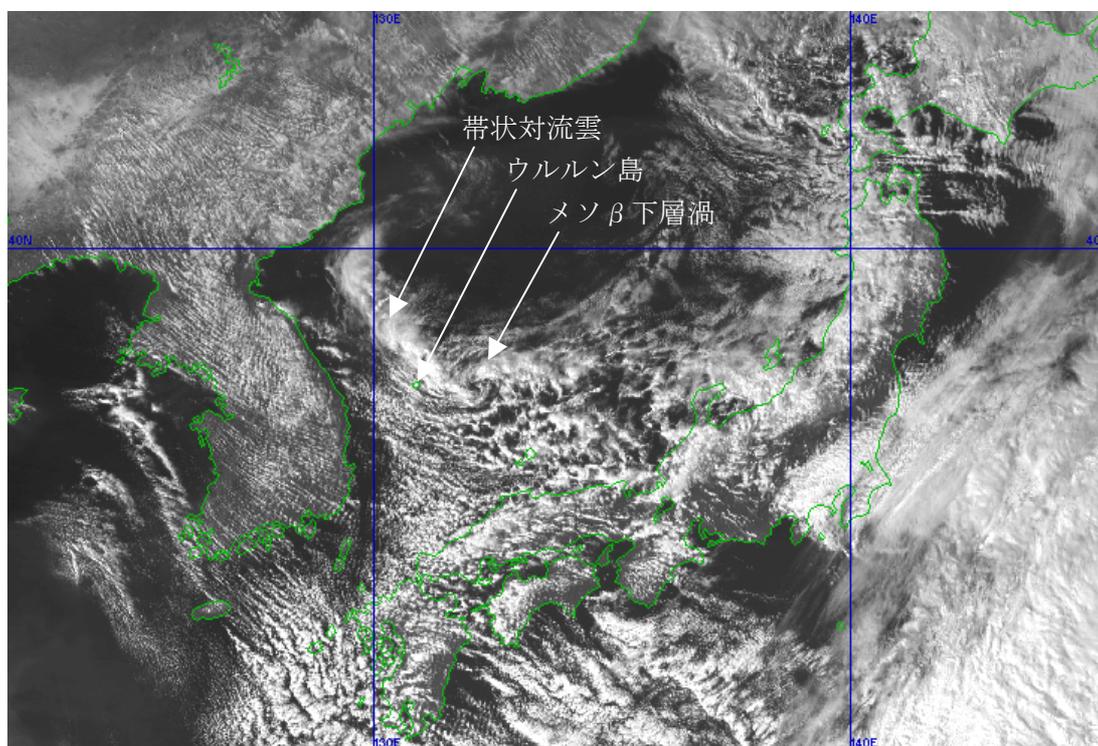


## 今月の気象衛星画像 (2006年3月)



2006年3月2日15時の可視画像

### 帯状対流雲に発生したメソβ下層渦

冬になると日本海には寒気の吹き出しに伴って筋状の対流雲列が現れる。中でも朝鮮半島の付け根付近から、日本海中・西部にかけて現れる幅の広い対流雲列が見られることがある。これは「帯状対流雲」と呼ばれ、朝鮮半島にある山岳の影響により、風下の日本海に局地的な収束帯が形成されるため、帯状の対流雲列が発生すると言われている。

画像は3月2日15時の可視画像である。日本海西部には帯状対流雲が見られ、帯状対流雲上のウルルン島（韓国）の東には、小さな渦巻き状の雲域も見られる。この小さな渦巻き状の雲域は、大きさがメソβスケール（200～20km程度）に属する下層の渦で、「メソβ下層渦」と呼ばれている。このメソβ下層渦は渦巻きの形状が時間の経過と共にしだいに明瞭となってきており、15時頃が最盛期であった。

一般に帯状対流雲には、発達した雄大積雲や積乱雲が伴っているため、その先端がかかる山陰や北陸では海岸や平地でも大雪となることがある。特にメソβ下層渦を伴っている場合は、メソβ下層渦が通過する際に、突風や雷を伴い局地的な大雪を降らせることがあるため注意が必要である。

(気象衛星センター)